

2017年7月2日

「これは天から降って来たパンである…このパンを食べる者は永遠に生きる。」 ヨハネ6：58

カファルナウムの会堂（シナゴグ）に集まったユダヤ人たちに、主イエスはご自分をパンとして提供されます。

彼らは主が「天から降って来たパン」だと言われるのに不満で、「つぶやき」始めます。「ヨセフの息子のイエス」と見る故です。しかし、主は「神のもとから来た者」であり、「父から聞いて学んだ者は皆わたしのもとに来る」と信じて待っておられます（→イザヤ54：13）。

ユダヤ人の先祖は、「荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった」のです。しかし、主は、「天から降って来た生きた（命を持った）パン」ですから、「世を生かすためのわたしの肉」を食べて欲しいのです。「私たちはキリストを殺して食べなければ生きられない者です」（吉田満穂師の1986年宮島聖会での説教）。

主の「肉を食べ、その血を飲まなければ…（永遠の）命はない」のです。「生きている父…わたしが父によって生きる…私を食べる者もわたしによって生きる」とは、「第1には生きている御父が…第2には御子が…第3には私たちが彼から受ける命がある」（カルヴァン）という意味です（死を恐れない人生！）。

主は今も「これはあなたがたのためのわたしの体である」（聖餐のことば）と言って食べさせられます（→讃202番）。

2017年7月9日

「あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」 ヨハネ6：69

ガリラヤ伝道の終わり頃、多くの弟子が去りますが、ペトロたちは主イエスを信じて共に歩む決心をします。

主の肉を食べ血を飲まなければ永遠の命を得られないという話を聞いて、多くの者が「実にひどい（厳しい→マタイ25：24）話だ」と言い、それにつまづいて「もはやイエスと共に歩まなくなった」とあります。主は「あなたがたに話した言葉は霊であり、命である」として、命を得るために辛抱を求められます。

そのあと主は十二弟子たちに、「あなたがたも離れて行きたいか」と質問されます。ペトロは皆を代表して、「あなたは永遠の命の言葉を持っておられ…あなたこそ神の聖者（メシア）です」と信仰を告白し（→マルコ8：29）、「わたしたちはだれのところへ行きましょうか」と、主と共に歩む決意を表明します（→新聖歌355番「ひと足ひと足」）。

その時、主は小さな声で、「その中の一人は悪魔だ」とユダのことを言われたのを、ヨハネは聞きました（→15：25）、その時の主のお気持ちがあったのは、ずっと後のことでした（→64節）。

私たちは主を信じた時から、いつも共に歩いて下さる方を持つのです（「同行二人」！）。「主よ終わりまで仕えまつらん」（讃338番）と歌いましょう。

2017年7月16日

「イエスは言われた。『わたしの時はまだ来ていない。…』」 ヨハネ7：6

6章でガリラヤ伝道が終わり、7章からは、エルサレムでの苦難（十字架）へ向かって、主イエスは踏み出されます。

ペトロの信仰告白の後、「ユダヤ人の仮庵祭」（秋の収穫頃）までの約半年間「イエスはガリラヤを巡って」おられましたが、主の弟たちが来て「ユダヤに行き…業を（そこにいる）弟子たちにも見せてやりなさい」と語ります。「彼らは野心に駆られて、キリストが世に知られ、評判になることを望んだ」（カルヴァン）のでしょう（信仰のない肉親の情！）。

彼らの親切な誘いに対して、主は慎重に考えて、「わたしの時はまだ来ていない」と言って断わられます。「世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる」ので、立場の違いを無視すべきではありません（クリスチャンとして「ノー」と言える勇氣！）。

しかし、「兄弟たちが祭りに上って行った」直後、主は「隠れるようにして上って」行かれます。「ユダヤ人（指導者）たちはイエスを捜し」て捕らえようとしているので、「良い人だ」と言う人は少なく、多くの人々は「忤度」（そんたく）して「公然と語る者」はいません。

主は、「わたしの時（カイロス＝決定的な時）」が来るのを待っていて、命を懸けて踏み出されます（→讃332番）。

2017年7月23日

「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。」 ヨハネ7：24

仮庵祭（8日間）の4日目頃、主イエスは神殿で語り、ご自分が救い主であることを正しく理解させようとされます。

主の教えを聞いて、人々は「学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と驚きます。ペトロやヨハネも、「無学な普通の人」（使徒4：13）でしたが、大胆に語りました。教会で大切なのは、聖書をよく知ってそれを正しく伝える事です。

主の教えは、「わたしをお遣わしになった方（父なる神）の教え」であり（→三位一体の神！）、「この方の御心を行おうとする者」にはそれがわかるでしょう。主はいつも、「律法学者のようにではなく、（神からの）権威ある者として」（マルコ1：22）教えられます。

主はユダヤ人たちに、「なぜ、わたしを殺そうとするのか」と問い、モーセの教えに言及されます。「あなたたちは安息日にも割礼を施して」います（→レビ12：3）。それなのに、「わたしが安息日に全身をいやした（→5：9）からと言って腹を立てる」のは、モーセの教えに反するのではないのでしょうか。

表面に惑わされず、深く考えて欲しいのです。「この戒めは…天の教えが問題になる時、特に必要」（カルヴァン）です（→讃501番「命の御言葉」！）。

2017年7月30日

「わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を…」 ヨハネ7:28

安息日を破っただけでなく、「御自分を神と等しい者とされた」(5:18)ことがユダヤ人たちを怒らせているので、主イエスは、御自分が何者か、どこから来て、どこへ行くのか、を明らかにされませぬ(→ゴージャンの絵！)。

「エルサレムの人々」(地元民)は事情通で、指導者たちが主をメシアと認めたらどうするか、と考える一方、主がガリラヤの出身なのでメシアであるはずがない、と軽蔑して語り合います。

それを聞かれた主は、そういう表面的なことで判断するのではなく、「わたしをお遣わしになった方(父なる神)」とご自身のことを見て判断せよ、と言われます(どこから来たか！)。人々は捕らえようとはしますが、「イエスの時はまだ来ていなかった」ので出来ません。

指導者たちが共謀して「イエスを捕らえるために下役どもを遣わし」た時に、主はまもなく「自分をお遣わしになった方のもとへ帰る」と宣言されます(どこへ行くのか！)。主はペトロに、「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後について来る」(13:36)と約束されます(私たちの希望！)。

主イエスを世に遣わされた真実な神を知る私たちは、「御国に上りて御前に伏す日」(讃 352 番)を喜んで待つのです。